

新千歳空港に導入！エコな燃料で走る作業車両



空港作業車両がCO₂排出量削減に貢献

JALグループは2024年7月15日、新千歳空港に配備している作業車両において、バイオディーゼル燃料の通年使用を開始しました。

この取り組みは、JAL、セコマ、豊田通商、千歳空港モーターサービス(CAMS)の4社が手を取り合い、本格運用に向けて実証実験を重ねてきたものです。このたび給油体制の整備により、貨物用コンテナを牽引するトリーングトラクター9台、機材を牽引するトリーングカー1台、フォークリフト1台の燃料を軽油からバイオディーゼル燃料に置き換えることが可能となり、CO₂排出量を年間で約54t削減できる見込みです。

JAL北海道支社長の林浩一は、「厳寒期にバイオディ

ーゼル燃料が凍結してしまうことが課題でしたが、軽油と混合したり、燃料タンクを温めたりする工夫により通年使用が実現しました。「ゼロカーボン北海道」が掲げるCO₂排出量削減への貢献はもちろんです。この取り組みがこれからの循環型社会をつくっていく弾みになるよう期待しています」と語ります。

「ホットシェフ」の廃食油をバイオディーゼル燃料に

このバイオディーゼル燃料は、北海道に縁のある方々にはお馴染みの、セイコーマートの店内調理「ホットシェフ」から出る廃食油を原料としています。セコマは環境への配慮から、独自のサプライチェーンを活かし、古紙、牛乳パックなどのリサイクル、農産物の規格外品や食材の端材の有効活用いち早く取り組ん

今回のテーマに該当する目標



お披露目されたトリーングトラクターの前で。セコマの丸谷会長(右)とJAL北海道支社長の林。 撮影/吉川麻子

START!

ホットシェフの廃食油が原料!



1 ホットシェフの店内調理で油を使用



2 道内店舗から使用済み油を回収

GOAL!

トリーングトラクターなどが動く!



4 豊田通商が配送・供給した燃料をCAMSがJAL作業車両に給油



3 白老油脂でバイオディーゼル燃料に精製

できました。

「廃棄するものをできる限り資源化する努力を続ける中で、店舗のキッチンから日々大量に出る廃食油の活用方法を20年以上前から模索してまいりました。まずはボイラーに使用することから始め、現在では道内の店舗から年間約160万ℓの廃食油を回収し、グループ会社の白老油脂でバイオディーゼル燃料に精製、配送トラックの燃料に使用するほか、他社へ供給できるまでになりました」と語るのは、セコマの代表取締役会長・丸谷智保さん。この燃料とJALとの出合いが、今回のプロジェクトに結び付いたのです。

「ホットシェフの揚げ油が姿を変え、飛行機を地上で支える作業車両を動かす——こうした地に足を着けた、道内のエネルギーの地産地消がCO₂排出量削減に貢献できるのは、大変意義深いこと。あのカツ丼の油が？」と思われるお客さまが、環境問題を意識するきっかけにもなると嬉しいですね」と丸谷会長。



トリーングトラクターには関係各社のロゴが。

専用タンク2台を整備場に導入。

JALグループは今後も、地域に根差したパートナー企業と共に、持続可能なエネルギー利用によるCO₂排出量削減と地産地消による循環型エネルギー活用への取り組みを推進し、社会課題の解決に取り組んでまいります。



2015年9月、全国連加盟国(193カ国)により「持続可能な開発目標(Sustainable Development Goals: SDGs)」が採択されました。2030年までに、貧困や気候変動、平和的社会などの17の目標を達成すべく、JALグループも社会の課題解決に取り組んでいきます。